

自律的高校進学動機尺度作成の試み

筑波大学大学院（博）人間総合科学研究科 永作 稔

筑波大学心理学系 新井邦二郎

Constructing a scale for autonomic motivation to enter high school

Minoru Nagasaku and Kunijiro Arai (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purpose of this study is to construct a scale for the autonomic motivation to enter high school and to examine its reliability and validity. 32 items were collected in a pilot study, which was administered to 123 high school students, from which a pilot scale was created, with items classified into external regulation, introjected regulation, identified regulation, and integrated/intrinsic regulation based on self-determination theory (Ryan & Deci, 2000). This scale was administered to 478 high school students. Although the pilot scale employed four types of motivation, the results of factor analysis identified three factors or subscales (external/introjected regulation, identified regulation, and integrated/intrinsic regulation) consisting of 30 items. Reliability was confirmed by the coefficient alpha and the test-retest method. The results indicating a simplex structure or ordered correlational structure among the subscales demonstrate construct validity.

Key words: self-determination theory, school transition, motivation, high school

問題と目的

自己決定理論 (Self-Determination Theory: SDT) とは, Deci & Ryan (1985, 1991) など E.L. Deci や R.M. Ryan らの内発的動機づけに関する一連の研究をまとめたものである (Ryan & Deci, 2000). Deci & Ryan (1985) によれば, 内発的動機づけは動機づけの重要なかたちの1つであるが, それは唯一のものではなく, また唯一の自己決定的な動機づけでもない主張されている。そして, それまで内発的動機づけと外発的動機づけとは対極にある二分法的なものとみなされてきたのに対して, Deci & Ryan (1985, 1991) は相対的な自己決定性 (自律性) の程度によって区分することができると主張した。また, SDT には, 生体的統合理論 (organismic integration theory) と呼ばれるサブ理論が存在し, これらの区分を説明している。生体的統合理論とは, 個人の中に行動の価値が内在化されていく過程

を詳細に説明したものであり (Ryan & Deci, 2000), 動機づけの中に調整スタイルという下位概念を想定し, それらを自己決定性の違いにより分類している。調整スタイルとは, 簡潔にいうと「その行動を行わなければならないとき, もしくは行いたい時の自分なりの理由づけ」であり, それらは, より非自己決定的な調整スタイルから順に, 外的調整, 取り入れ的調整, 同一化的調整, 統合的調整, 内的調整と分類されている。外的調整とは, 随伴する外的な要求や報酬を満たすために行われる調整スタイル (Ryan & Deci, 2000) であり, 最も非自己決定的である。したがって, 典型的な外発的動機づけといえる。取り入れ的調整は, 部分的に内在化されている調整スタイルである。その行動を行うことについて自分なりの受け入れをしているが, それを自分自身のものとして十分に受け入れていない状態であり, 罰や不安を避けたり, プライドのような自我拡張の感覚を手に入れたりするために行われる (Ryan &

Deci, 2000). そして, より内在化が進んだ, 自律的な外発的動機づけのかたちが同一化的調整である. 同一化的調整には行動を個人的に重要なものとして受け入れるような行動理由に対する価値付けの意識が含まれる (Ryan & Deci, 2000). 何かをすることが, たとえ何らかの手段であったとしても自分にとって大切であるという意識が成立すれば, それはより自律的だといえるのである. そして, 最も自律的な外発的動機づけが統合的調整である. 統合的調整は行動を起こす際の自己調整が自己に対して十分に同化されたときに生じ, 自分のその他の価値や欲求と一致していると認知しているというものである (Ryan & Deci, 2000). そしてそれは, 自律的であり葛藤がない (Igreja, Zuroff, Koestner, Brouillette & Lalonde, 2000). また, 統合的調整は内発的動機づけの多くの性質を共有する (Igreja et al., 2000). 統合的調整に特徴付けられた行動は, それらについての生得的な満足感というよりは, 別の結果を得るために行われるので, まだ外発的動機づけではあるけれども, 内発的動機づけの多くの性質を共有している (Ryan & Deci, 2000) と先行研究でも述べられているように, 統合的調整は内発的動機づけにもっとも近い調整スタイルであるといえる. Ryan & Connel (1989) はこれらの性質の異なる, ささまざまなタイプの動機づけ (調整スタイル) が相対的な自律性の連続体に並ぶという仮説を検証している. 彼らは, 小学生を対象に, 達成行動に対する自己調整について広範囲にわたる調査を行った. そして, 外的, 取り入れ的, 同一化的, そして内的な調整スタイルがある程度の単純構造によって相関しているということを見出し, 生体的統合理論, および自己決定連続体についての実証的な証拠を示した. その後, SDT を応用した多くの研究で, 同様の相関関係が証明されている (藤原, 2002; Hayamizu, 1997; Li & Harmer, 1996; 松本, 2000; Pelletier, Fostier, Vallerand, Tuson, Briere & Blais, 1995; Vallerand & Bissonnette, 1992; Yamauchi & Tanaka, 1998).

また, 元来は学習行動の領域で研究が始まった SDT であるが, 近年では, 精神的健康や適応などを予測できる理論としても注目を集めている (eg., Igreja, et al., 2000; Kasser & Ryan, 1999; Ryan, Rigby & King, 1993; Sheldon & Kasser, 1995). これらの先行研究では, より自律的な調整スタイルで遂行された行動においては, その後の状態がより適応的であり, 反対に, より非自己決定的な調整スタイルで遂行されている行動ではその後の状態が適応的ではないということが示されている. たとえば, Ryan et al. (1993) はキリスト教大学の学生に教会

に礼拝する理由を質問し, その自律性の違いにより学生の心理的適応に違いがあることを見出した. ここでは, 教会に礼拝することに対して統合的な自己調整を行っているものは, General Health Questionnaire (GHQ) の各下位尺度得点 (不安, 抑うつ, 身体的兆候, 社会的活動障害), および総得点が低く, 対照的に取り入れ的な調整スタイルで礼拝を行っているものは, 社会的活動障害を除くすべての下位尺度得点と, 総得点が高いことが示された.

このように, 適応的な行動や精神的健康の予測因として, SDT に基づく自律的な動機づけが有用であるということを示す先行研究がいくつか示されてきている. そこで, 本研究では, 高校という新しい学校環境への適応を予測する予測因として用いるべく, 高校への自律的進学動機について検討したいと考えた.

山本・ワップナー (1992) にも「新入学はある種の危機的な移行事態である」とあるように, 新しい学校環境に移り, そこに適応していくことは, 多くの生徒にとって, 一つの大きな課題であるといえる. また, こうした新入学に伴う学校移行に関して, 入学後の学校適応や進路指導との関連から, 近年, 研究者及び教育実践者の関心が高まってきている (古川・松川・浅川・上地, 2001). このような学校移行 (school transition) に関しては, 主に米国で, 移行に伴うネガティブな結果についての報告が多くなされているが (eg., Barone, Aguirre-Deandreis & Trickett, 1991; Isakson & Javis, 1999; Lord & Eccles, 1994; Reyes & Hedeker, 1993 など), それらを概観すると, 学校移行に伴い, 成績や出席率, 所属感の低下, 生活ストレスの増加による適応感の低下などが, どの研究においても見られている. しかしながら, 学校移行に関する研究は, 主に小学校から中学校に関する研究が多くなされており, 高校移行時における学校適応に関する研究は非常に少ないということも指摘されている (古川他, 2001, Isakson & Javis, 1999).

また一方で, 近年わが国では高等学校において中途退学者が増加傾向にあり, 不登校などをはじめとする高校生の学校不適応に関してもさまざまな領域から関心を集めている. わが国における高校生の学校不適応の心理的側面に関連する研究で, もっとも数が多いのは高校生のストレスに焦点を当てたものであり (菅・上地, 1996, 大迫, 1994, 斉藤, 1997, 坂野・嶋田・三浦・森・小田・猿渡, 1994, 嶋, 1994, 嶋田, 鈴木, 神村, 国分, 坂野, 1995, 鈴木・嶋田・富家・神村・国分, 1995 など), ストレス対処行動や

認知的個人差，ソーシャルサポートなどとの関連についてそれぞれ言及している。しかしながら，このように高校生のストレスという視点から高校生の学校不適應に関する研究が蓄積されてきている一方で，前述のような学校移行と学校適應を関連付けるような研究はほとんどなされていない。さらには，入学時点での心理状態からその後の学校適應を予測するようなプロスペクティブな研究は，まったくといってよいほどなされていないのが現状である。したがって，高校生の学校適應の予防的介入をするために，学校移行という観点からの実証的な研究を行うことは意義深いと考えられる。

そこで，本研究の目的は，高校という新しい学校環境への適應を予測したり，また，不適應を予防したりするのに役立つと考えられる自律的高校進学動機尺度を作成し，その信頼性，妥当性を検討することとした。

予備調査

目的

高校に進学したばかりの高校1年生を対象に，高校進学の理由を自由記述によって収集し，それをSDTに基づいて分類する。

方法

項目の収集・精選 「高校に進学した理由は何ですか」という質問に対し自由記述式で回答をさせた。その後，収集された進学理由について，発達心理学を専攻する大学院生4名が，KJ法を用いて項目の精選を行った。

調査対象 東京都の公立高等学校（普通科）に在籍する1年生123名

調査時期 2002年4月

項目の分類 精選された進学理由について，自己決定理論および動機づけを専門とする専門家に指導を受けた発達心理学を専攻する大学院生6名によって分類を行った。分類に際しては，収集された質問項目を列挙した質問紙を配布した。そこに，それぞれの項目が，外的調整，取り入れの調整，同一化的調整，内的調整，該当なしのどれにあたるかを選択させるという形で分類を行った。またその際には，自己決定理論と各調整スタイルについて説明した簡単な資料を添えた。

結果と考察

収集された進学理由について，発達心理学を専攻する大学院生4名が，KJ法を用いて項目の精選を

行ったところ，36の進学理由が収集された。次に，この4名の大学院生の他，同様に発達心理学を専攻する大学院生2名を加えた計6名に，収集されたそれぞれの進学理由について，外的調整，取り入れの調整，同一化的調整，内的調整，該当なしのどれに当たるかを個別に評定させた。また，評定に際しては自己決定理論と自己調整スタイルについての説明を記した資料を渡した。そして，6人中4人以上の同意が得られた項目のみを採択した。その結果，「親や保護者が行けというから」「高校には行かなければいけないものだから」など，外的調整にあたるもの7項目，「勉強しないと不安になるから」「中卒では嫌だから」など，取り入れの調整にあたるもの6項目，「自分の学力を上げたいから」「行事が面白そうだから」など，同一化的調整にあたるもの11項目，「学校が好きだから」「自分が気に入ったから」など，内的調整にあたるもの6項目に分類された。内的調整に分類された項目の中には統合的調整（Ryan & Deci, 2000）とも考えられるものが存在したが，内的調整と統合的調整は多くの部分を共有している（Igreja et al., 2000; Ryan & Deci, 2000）といわれているため，本研究では統合的調整・内的調整として，まとめて扱うこととした。また，「なんとなく」「家から近いから」「ひまだから」「あそびたいから」「高校に行きたいから」の5項目は該当なしに分類された。「自分の学力にあっていたから」「とりあえず高校生活を送りながら将来のことを決めようと思ったから」の2項目については，その内容の捉え方によって6人の回答がばらついた。そのため，その内容から，前者は「自分が行きたいかどうかではなく自分の学力レベルに合わせて選んだ結果そうだったから」，「自分の学力レベルから考えると，とてもあっていて良いと思ったから」の2項目に，後者は「とりあえず高校に行っておけば将来のことを決めずに済むから」「高校生活を送る中で将来のことを決めようと思ったから」の2項目に分割した。そして再度，大学院生6名による分類を行った。その結果，「自分が行きたいかどうかではなく自分の学力レベルに合わせて選んだ結果そうだったから」は外的調整に，「自分の学力レベルから考えると，とてもあっていて良いと思ったから」は同一化的調整に，「とりあえず高校に行っておけば将来のことを決めずに済むから」と「高校生活を送る中で将来のことを決めようと思ったから」はいずれも該当なしに分類された。したがって最終的に，外的調整8項目，取り入れの調整6項目，同一化的調整12項目，統合的・内的調整6項目の計32項目が準備された（Table 1）。

Table 1 分類された自律的進学動機尺度（原案）と各項目の平均値，標準偏差

	項目	平均値	標準偏差
外的調整	ほかの学校には学力が足りなかったから	2.72	1.15
	普通は学校に行くものだから	3.47	1.24
	高校にはいかなければならないものだから	2.93	1.30
	親や保護者が行けというから	2.35	1.33
	高校くらい行っておかないといけないから	3.87	1.09
	みんなが行くから	3.04	1.41
	自分がいきたくないかどうかではなく自分の学力レベルに合わせて選んだ結果そう なったから	2.97	1.26
	先生が行けといったから	2.04	1.19
取り入れ 的調整	勉強しないと不安になるから	3.05	1.19
	勉強しないと恥ずかしいから	2.53	1.08
	高校に行かないと恥ずかしいから	3.04	1.30
	中卒では嫌だから	3.65	1.34
	就職するのが嫌だったから	2.44	1.32
	高校に行かないと就職のときに困るから	4.03	1.02
同一化 的調整	自分の学力を上げたいから	3.72	1.06
	勉強したほうが得だと思ったから	3.62	0.99
	友達を増やしたいから	4.07	0.88
	行事が面白そうだから	3.82	1.06
	部活動をやりたかったから	3.67	1.20
	知識を増やしたいと思ったから	3.80	1.00
	高校にいておけば将来の選択の幅が広がるから	4.10	0.86
	いろいろな資格をとるために必要だから	3.40	1.02
	自分の将来の夢をかなえるため	3.83	1.07
	大学や専門学校などの上級学校に進学したいから	4.03	1.02
進学のための勉強をしたいと思ったから	3.73	1.05	
自分の学力レベルから考えると、とてもあっていて良いと思ったから	3.48	1.04	
統合的・ 内的調整	校風が良いと思ったから	3.90	0.98
	自分が気に入ったから	3.89	0.99
	説明会や情報誌などで調べて良いと思ったから	3.36	1.08
	学校が好きだから	3.69	1.03
	高校というものが楽しそうだから	4.09	0.87
	学校は楽しいから	4.10	0.89

本調査

目的

予備調査によって準備された自律的進学動機尺度（原案）を実施し，その信頼性，妥当性を検討する。

方法

調査対象 第1回調査においては東京都の公立高等学校（普通科）3校に在籍する1年生480名（男子240名，女子239名，不明1名）のうち，記入漏れ，

記入ミスを除いた478名（男子239名，女子238名，不明1名）を分析の対象とした。また，約3週間の間隔を置いて実施された再検査においては，第1回調査に参加した1校3クラスの生徒123名（男子61名，女子62名）のうち，欠席，記入漏れ，記入ミスを除いた112名（男子56名，女子56名）を分析の対象とした。

調査時期 2002年5月，および2002年6月

調査材料 a) 自律的進学動機尺度（原案）：予備調査によって準備された32項目，4件法。b) 自己決定感尺度（桜井，1993）：8項目，4件法。本尺度

Table 2 因子分析（主因子法・プロマックス回転）結果

	因子負荷量			共通性
	I	II	III	
I. 外的・取り入れの調整 (14項目, $\alpha = .87$)				
17. 普通は学校に行くものだから	.80	.09	-.20	.63
16. 高校にはいかなければならないものだから	.74	.03	-.15	.54
32. 高校に行かないと恥ずかしいから	.74	.03	-.01	.54
25. 中卒では嫌だから	.68	-.03	-.02	.46
8. 高校くらい行っておかないといけないから	.63	-.03	-.03	.41
9. 高校に行かないと就職のときに困るから	.58	-.06	.11	.36
32. 勉強しないと恥ずかしいから	.56	.05	.25	.41
12. 先生が行けと行ったから	.53	-.02	-.09	.28
11. 親や保護者が行けというから	.53	.02	-.09	.27
1. みんなが行くから	.48	.01	-.15	.24
13. 勉強しないと不安になるから	.43	.04	.36	.36
28. 自分がいきたいかどうかではなく自分の学力レベルに合わせて選んだ結果そうなったから	.43	-.24	.18	.28
19. 就職するのが嫌だったから	.39	.11	.00	.16
2. 他の学校には学力が足りなかったから	.37	-.09	.20	.19
II. 統合的・内的調整 (9項目, $\alpha = .84$)				
5. 学校は楽しいから	-.07	.71	-.05	.50
6. 高校というものが楽しそうだから	.06	.71	-.06	.48
23. 校風が良いと思ったから	-.06	.69	.05	.51
18. 学校が好きだから	.00	.69	-.03	.46
24. 行事が面白そうだから	-.02	.68	.01	.46
21. 自分が気に入ったから	-.17	.65	.00	.47
30. 友達を増やしたいから	.20	.54	.04	.33
20. 説明会や情報誌などで調べて良いと思ったから	-.02	.48	.16	.31
27. 部活動をやりたかったから	.12	.41	.04	.19
III. 同一化的調整 (7項目, $\alpha = .79$)				
14. 自分の学力を上げたいから	.05	.06	.74	.58
3. 進学のための勉強をしたいと思ったから	-.13	-.13	.73	.50
22. 知識を増やしたいと思ったから	-.06	.08	.73	.56
31. 勉強したほうが得だと思ったから	-.13	-.08	.61	.45
4. 大学や専門学校などの上級学校に進学したいから	.16	.10	.60	.35
7. 自分の将来の夢をかなえるため	-.18	.11	.41	.23
10. いろいろな資格をとるために必要だから	.24	.05	.31	.18
	因子負荷量二乗和	4.98	3.99	3.38

は、自律的進学動機尺度の構成概念妥当性を検討するために用いた。

調査手続き 調査は、被調査者の所属するクラス単位で、集団で実施された。また、各高等学校のクラス担任に調査を委託したため、より正確な実施が可能となるように、具体的方法や注意事項を記した「調査の手引き」を作成し各学校の担任教師に配付した。

結果と考察

1. 因子分析

自律的進学動機尺度32項目について、主因子法プロマックス回転による因子分析を行った。スクリープロット法により3因子が妥当であると判断されたため、因子数を3に固定し同様の因子分析を行った。さらに、因子負荷量の低い2項目を除外し再度分析した。その結果をTable 2に示す。第1因

子は「普通は学校に行くものだから」「高校には行かなければならないものだから」など予備調査の段階で外的調整や取り入れの調整に分類された項目で構成されていたため、「外的・取り入れの調整」と命名した。また、第Ⅱ因子には「学校は楽しいから」「高校というものが楽しそうだから」といった予備調査で統合的・内的調整に分類された項目が多く含まれていたため「統合的・内的調整」と命名した。さらに、第Ⅲ因子には「自分の学力を上げたいから」「進学のための勉強をしたいと思ったから」など、予備調査の段階で同一化的調整に分類されていた項目で構成されていたため「同一化的調整」と命名した。また、その内容を見ると、第Ⅲ因子には特に学業面に関するものが中心となっていることがうかがえた。

因子分析の結果から、予備調査において理論的に想定された4段階の調整スタイルに因子が分かれなかった。特に、外的調整と取り入れの調整はまとめて一つの因子を構成していた。これまでの先行研究では因子分析などの統計的処理を用いず、理論的背景のもとに下位尺度を分類している研究が多く (eg., Hayamizu, 1997; Pelletier, Vallerland & Bissonnette, 1992; Ryan & Connell, 1989; Yamauchi & Tanaka, 1998), このような因子的妥当性についての検討は今後の課題であると考えられる。

2. 信頼性の検討

Cronbachの α 係数 自律的・進学動機尺度の各下位尺度についてCronbachの α 係数を算出したところ、外的・取り入れの調整が $\alpha = .87$ 、統合的・内的調整が $\alpha = .84$ 、同一化的調整が $\alpha = .79$ 、といずれも比較的高い値を示していた。したがって本尺度は十分な信頼性を有していると考えられる。

再検査信頼性 第1回調査後、約3週間の間隔において行われた再検査との相関係数は、それぞれ、外的・取り入れの調整が $r = .76$ 、統合的・内的調整が $r = .73$ 、同一化的調整が $r = .72$ といずれも高い相関の値を示していた。したがって再検査信頼性からも本尺度の信頼性が確認できたと考えられる。

3. 妥当性の検討

内容的妥当性 本研究で準備された項目は、高校進学をしたばかりの高校1年生を対象に予備調査を行い、その結果収集された項目を、専門家の指導のもとで、発達心理学を専攻する大学院生6名によって分類している。したがって本研究で作成された自律的・進学動機尺度の各項目については内容的妥当性を有していると考えられる。

構成概念妥当性 SDTでは、動機づけの下位概念である調整スタイルは自己決定の程度によって一次元上に連続体として並べることができることとされている。このような連続性を検証する方法として、Ryan & Connell (1989) は調整スタイルを測定する各下位尺度間の単相関をもとに、概念的に隣接する調整スタイル同士は関係性が強く、概念的に離れたものほど関係性が弱くなるということを実証して、その論拠としている。このような理論的背景に基づき、その後の多くの研究 (藤原, 2002; Hayamizu, 1997; Li & Harmer, 1996; 松本, 2000; Pelletier et al., 1995; Vallerland & Bissonnette, 1992; Yamauchi & Tanaka, 1998) でも、各下位尺度間の相関分析を行い、作成された尺度の構成概念妥当性を確認している。本研究においても、因子分析によって抽出された、外的・取り入れの調整、統合的・内的調整、同一化的調整の3因子が先行研究と同様の相関関係を示していれば、その構成概念妥当性を確認することができると考えられる。つまり、自己決定性の程度が最も低い外的・取り入れの調整は、中間的位置にある調整スタイルの同一化的調整とは若干の正の相関関係を示すであろうが、最も自律的な自己調整スタイルである統合的・内的調整とは無相関か、あるいは負の相関を示すと考えられる。また、中間的な位置の中でもより自律的な調整スタイルである同一化的調整と最も自律的な統合的・内的調整はある程度の正の相関関係を示すであろう。そこで、このような仮説を検証するために、先行研究と同様、各下位尺度間の相関の検討を行った (Table 3)。その結果、外的・取り入れの調整と同一化的調整には $.10$ ($p < .05$) と若干の正の相関が示され、同一化的調整と統合的・内的調整には $.30$ ($p < .01$) の正の相

Table 3 下位尺度間相関係数

	外的・取り入れの調整	内的・統合的調整
外的・取り入れの調整		
内的・統合的調整	-.08	
同一化的調整	.10*	.30**

* $p < .05$ ** $p < .01$

関が認められた。また、概念的に離れている外的・取り入れの調整と統合的・内的調整は無相関であった ($r = -.08, n.s.$)。したがって、仮説どおりの結果が得られ、下位尺度間の相関関係からみた自律的高校進学動機尺度の構成概念妥当性が確認された。

また、自己決定感尺度 (桜井, 1993) との相関による構成概念妥当性の検討も行った。仮説としては、最も自己決定性が低い外的・取り入れの調整は負の相関関係が示され、自律性では中間的位置にある同一化的調整とは無相関が、そして、最も自律的である統合的・内的調整とは正の相関関係が示されると考えられる。このような仮説のもとに、相関分析を行った結果、外的・取り入れの調整では $r = -.26$ ($p < .01$) の負の関連が、同一化的調整では相関がなく ($r = .01, n.s.$)、統合的・内的調整では $r = .10$ ($p < .05$) の正の相関が得られた。したがって、自己決定感尺度との相関関係による構成概念妥当性についても支持された形となった。統合的・内的調整にさほど大きな相関が得られなかったことについては今後の課題であるが、このような結果になった理由のひとつに進路選択という選択場面の特殊性があったと考えられる。進路選択では自分が選択したい選択と、現実的に選択可能な選択肢が異なる場合がある。たとえば、従来のSDTに基づいた尺度のように、「課題をする、しない」や「運動をする、しない」といった場面では、自分の自己調整がそのまま行動につながる。しかし、進路選択場面では、自己調整として「自分が気に入った」や「行事が面白そうだった」と思える学校があったとしても、現実としてそこに進学できるとは限らない。したがって、本来自己決定志向的な生徒でも、進路選択として非自己決定的な進路選択にならざるを得ない状況におかれている可能性も否定できない。今後、より妥当性を高めていくためには、進路選択という場面的制限にとらわれない変数を用いて、再度構成概念妥当性を検討する必要があると考えられる。しかしながら、全体としては一定程度の妥当性が確認できたといえよう。

4. まとめと今後の課題

本研究では、SDTに基づいて、自律的高校進学動機尺度の作成を行った。その結果、外的・取り入れの調整、同一化的調整、統合的・内的調整の3つの下位尺度からなる尺度が作成され、その信頼性、妥当性が支持された。今後は本尺度を用いて、自律的高校進学動機が実際の学校適応にどのように関連しているのかを検討することが必要であると考えられる。このような検討を加えることにより、中学生に

対する進路指導や高校生に対する生徒指導を行う上で、また、高校生の学校不適応の第一次予防や第二次予防を行う上で有用な知見を提供することができると考えられる。また、本研究では、因子分析の結果、予備調査の段階で理論的に想定していた4つの調整スタイルにはならなかった。本尺度の因子的妥当性については、今後確認的因子分析などを用いて検討を重ねていく必要があると考えられる。

引用文献

- Barone, C., Aguirre-Deandreis, A.I. & Trickett, E.J. 1991 Means-ends problem-solving skills, life stress, and social support as mediators of adjustment in the normative transition to high school transitions. *American Journal of Community Psychology*, 19, 207-225.
- Deci, E.L. & Ryan, R.M. 1985 Intrinsic motivation and self-determination in human behavior. New York; Plenum.
- Deci, E.L. & Ryan, R.M. 1991 A motivational approach to self: Integration in personality. In R. Dienstbier (Ed.), *Nebraska Symposium on Motivation*, 38, 237-288.
- 藤原善美 2002 ライフコース展望動機づけ尺度 (The Prospective Motivation of Life course Scale : PMSL) の作成の試み 日本教育心理学会第44回総会発表論文集, 296.
- 古川雅文・松川隆夫・浅川潔司・上地安昭 2001 高校進学に伴う学校適応に関する研究—中学校での進路意識, 学校適応と高等学校での学校適応の関連— 進路指導研究, 20, 1-10.
- Hayamizu, T. 1997 Between intrinsic and extrinsic motivation. *Japanese Psychological Research*, 39, 98-108.
- Igreja, I., Zuroff, D.C., Koestner, R., Brouillette, M.J. & Lalonde, R. 2000 Applying self-determination theory to the prediction of distress and well-being in gay men with HIV and AIDS. *Journal of Applied Social Psychology*, 30, 686-706.
- Isakson, K. & Jarvis, P. 1999 The adjustment of adolescents during the transition into high school: A short-term longitudinal study. *Journal of Youth and Adolescence*, 28, 1-26.
- 菅 徹・上地安昭 1996 高校生の心理・社会的ストレスに関する一考察カウンセリング研究, 29, 197-207.
- Kasser, V. & Ryan, R.M. 1999 The relation of psy-

- chological needs for autonomy and relatedness to vitality, well-being, and mortality in a nursing home. *Journal of Applied Social Psychology*, 29, 935-954.
- Li, F. & Harmer, P. 1996 Testing the simplex assumption underlying the sport motivation scale: a structural equation modeling analysis. *Research Quarterly For Exercise and Sport*, 67, 396-405.
- Lord, S.E., Eccles, J.S. & McCarthy, K.A. 1994 Surviving the junior high school transition. Family processes and self-perceptions as protective and risk factors. *Journal of Early Adolescence*, 14, 162-199.
- 松本裕史 2000 運動行動の動機づけに関する研究 — 自己決定理論の応用 — 早稲田大学大学院人間科学研究科修士論文 (未公刊)
- 大迫秀樹 1994 高校生のストレス対処行動の状況による多様性とその有効性 健康心理学研究, 7, 26-34.
- Pelletier, L.G., Fortier, M.S., Vallerand, R.J., Tuson, K.M., Briere, N.M. & Blais, M.R. 1995 Toward a new measure of intrinsic motivation, extrinsic motivation, and amotivation in sports: The Sport Motivation Scale (SMS). *Journal of Sport & Exercise Psychology*, 17, 35-53.
- Reis, H.T., Sheldon, K.M., Gable, S.L., Roscoe, J. & Ryan, R.M. 2000 Daily well-being: The role of autonomy, competence, and relatedness. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 26, 419-435.
- Ryan, R.M. & Connel, J.P. 1989 Perceived locus of causality and internalization. *Journal of Personality and Social Psychology* 57, 749-761.
- Ryan, R.M. & Deci, E.L. 2000 Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, 55, 68-78.
- Ryan, R.M., Rigby, S. & King, K. 1993 Two types of religious internalization and their relations to religious orientations and mental health. *Journal of Personality and Social Psychology*, 65, 586-596.
- 斉藤浩一 1997 進学校高校生のストレス認知スキーマ尺度の開発 カウンセリング研究, 30, 234-244.
- 坂野雄二・嶋田洋徳・三浦正江・森 治子・小田美穂子・猿渡末治 1994 高校生の認知的個人差が心理的ストレスに及ぼす影響 早稲田大学人間科学研究, 7, 75-90.
- 桜井茂男 1993 自己決定とコンピテンスに関する大学生用尺度の試み 奈良教育大学教育研究所紀要, 29, 203-208.
- Sheldon, K.M. & Kasser, T. 1995 Coherence and congruence: Two aspects of personality integration. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 531-543.
- 鈴木敏城・嶋田洋徳・富家直明・神村栄一・国分康孝 1995 高校生の中途退学指向性の研究 日本教育心理学会第37回総会発表論文集, 146-147.
- 嶋 信宏 1994 高校生のソーシャル・サポート・ネットワークの測定に関する一研究 健康心理学研究, 7, 14-25.
- 嶋田洋徳・鈴木敏城・神村栄一・国分康孝・坂野雄二 1995 高校生の学校ストレッサーとストレス反応との関連 日本教育心理学会第37回総会発表論文集, 142-143.
- Vallerand, R.J. & Bissonette, R. 1992 Intrinsic, extrinsic, and amotivational styles as predictors of behaviors: A prospective study. *Journal of Personality*, 60, 599-620.
- Williams, G.C., Freedman, Z., Ryan, R.M. & Deci, E.L. 1998 Supporting autonomy to motivate glucose control in patients with diabetes. *Diabetes Care*, 21, 1644-1651.
- 山本多喜司・S. ワップナー (編) 1992 人生移行の発達心理学 北大路書房
- Yamauchi, H. & Tanaka, K. 1998 Relations of autonomy, self-referenced beliefs, and self-regulated learning among Japanese children. *Psychological Reports*, 82, 803-816.

(受稿 3 月 20 日 : 受理 5 月 21 日)